

## 龍南會雜誌第五十四號を評す : 批評

著者	松露
雑誌名	龍南會雜誌
巻	5 5
ページ	5 0 - 5 6
発行年	1897-03-30
その他の言語のタイトル	龍南會雜誌第五十四号を評す : 批評
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4808">http://hdl.handle.net/2298/4808</a>

天妃洞畔霞五色。瓊廊迤邐鵬展翼。千椽飛閣壓山雄。五層峻塔出雲直。鹿鳴呦々夜月清。燈光輝々海波明。天橋松嶼何得匹。獨擅東瀛仙宮名。

守山城墟懷古

夙以弓箭代統袴。威名隆々海甸布。一朝感慨奉龍孫。誓濟中原靖天步。南風不競天日沈。長令英雄淚不禁。君不見守山城頭一片月。空照忠臣不死心。

太宰府詣菅公廟

田中文濤

忠誠奉君文教宣。樵夫牧子識其賢。一朝奸臣肆毒螫。謫遷窮海節逾堅。鐘聲林外秋雨裡。紅梅殿上春風前。終生門外不復出。拜除香火望東天。吾來吊古雙眼枯。老梅依舊色嬋娟。英魂萬古凝不去。扶植世道萬斯年。

稼堂批格律壯嚴能與風調

批評

龍南會雜誌第五十四號を評す

松露

楊柳綠濃くして櫻桃自ら紅に、春風微和を扇ぎて心自ら恍惚たり。此候斯時一夜机に倚りて巻をどれば、則我文壇の花第五十四號を得たりき。桃李言はざれども人をして言はしむ、讀み去り讀み來り花笑鶯囀春風駘蕩として頗る快を覺ゆ。是に於てか便ち秃筆を呵して旨評を試む、讀過一番一笑に値するを知らん。春花秋月去て復還れども落花流水終に止むるに由なし。想起す春光洋々花紅に柳綠なりし去年。昨今、我文子が靈彩の筆を荷ふて我文壇に上り、斯花の光彩をして陸離たらしめんとするを

見、吾雙手を擧げて新文子の行を盛んに去たりしを。今や斯の新文子は新の冠を脱して堂々天下に雄飛せんと欲して我文壇を下らんとす。乃ち年々歳々花相同、歳々年々人不同を誦して、一には以て其去るを悲しみ一には以て其雄飛を賀ぶ。只夫れ忘れんとして忘られざるは諸子が大に盡せし功勞の光なるかな、諸子幸に健在なれ。

論說欄内第一に内田先生の『答客問』を拜す先生自ら高ふして世の混濁に超然たるもの、獨り以て壯子教ふ可しとなし淳々として倦まず口に筆に大に吾人に賜せらる、每號概ね先生の高説を見ざるなき豈之が證にあらざとせんや、宜なる哉本號文苑所載の『上先生書』の眞摯以て先生の頌を爲れる。吾人は敢て茲に此賜に向て容喙せんや只謹んで教を聞かんのみ。

『塑像に現はれたる希臘の人生觀』是從來能筆才資を以て嘖々たりし高木敏雄君が遙に東都より寄せ来ものなり。君が我文壇に忠實なるもの、人皆之に對して赧顔せざるなきか。前號其三を視本號其餘の四を見る凡て七節。是吾人が最同情を以て大胆にも解剖批評せんとするもの、蓋し意あれば也。

其一は之が緒論にして此目的に達する研究の順序より『國民の理想は其事業若くは行爲に於てよりも其美術的製作物に於て著しく現』れ、『美術的製作中殊に塑像に於て最も著しく明かに認め得』べしとて此根底を證せり。終に臨むで人間生活に於ける三界説を立て之に審美略生活を加へたり。吾之に於て驟に同意し難しと雖も少くとも審美的生活の精神界に存す可きものたるを信するなり。然るに吾日本維新以前に於て之を考ふれば殆んど凡ては『物質界にのみ住』して、精神界の事は毫も普通人に研究せらるゝことなく、所謂義理人情を知るを以て物質界に對する精神界生活の極致となし、美てふ觀極めて少なし、即美を人に就て求むれば獨り容貌の美醜衣裳の可否を云々するに止まり骨格肉付の精神を見る可きが如きに於ては毫も思を馳するもの之なかりき。學者なるものあり思想を高遠に走らせ天地の理氣玄道等に就て研究するありしも、法式的哲學研究にあらざれば審美學などは影を捉ふるに難く、只美の觀念として詩歌繪畫に止まりぬ。之を彼元録時代の浮世繪に見ずや、宿治の

痴郎婀娜の艶女狂態を演じて花に戯れ月に淫かれる状を畫きて美なりとし艶なりと稱す。而も吾人一見嘔吐を催さんとす、其女は瘠小の柳腰風以て倒すべく蒼白の容顏病者かと怪まれ、男は過太の肥肉獨活の大木を思はしめ赤黒の面貌鬼かと疑はるゝもの、亦以て當時の理想見る可らざるにあらねども極めて不具の理想なり。又文人畫士佐派畫など稱するものを見ずや、徒らに氣顔を貴びて實を遠かり、鈞合遠近等に於て大に缺ぐる所あり、之に於ては高尚なる理想を存するを見れども餘りに過ぎたるものありて審美學上に於て取る可らざる所事し。然く日本の舊社會に在ては完全善美を欲する理想の閃影だに見る可らざるなり。維新改革に際してこの缺點補はれたるか吾之を言ふを悲めども、實際此折に當て物質界には非常に改革の功を奏せたりしも、因襲の久しき積弊の脱せざる、毫も精神界に於ては改革の事なく依然として舊態を存し、炊釜を磨きて外部のみ光り内部に殘粒の落ちざる觀をなしたりき。然れども世界の文物漸く盛んに我日本に進入し來るに及んで、歐州の哲學は漸く日本に播かれ、將に培はれんとして、萌芽を出せり。然るに人は其好む所に辟する者にして、易きに就くは情なり。故に哲學者は精神界物質界の罪惡掃蕩の任を負ふ可きを棄て、只管己の樂みに研究して人を益せざる者多し、乃ち日本文學者たるものゝ審美學思想に乏しく人心の改革を企つるものなきを知る可し、然れども文學者の任は決して然るものにあらず或は詩に歌に或は論說に種々の方法を以て人間の本色を常人に吸込せざる可らず。然らざれば日本將來の前途甚だ憂ふ可きものあり。吾人は文學者に一語を呈して片顧を要せんとす、即ち曰く社會人心の進善改良は文學者其道を講じ、凡ての業に於て正しく之を應用する人を俟て成るべしと、即ち本論其三にいへる『今日道義の盛衰は以て明日以後の美術文學の盛衰を卜す可し』に轉換(或意味範圍を異にして)なり。蓋し吾人が此論を評するもの意茲にあるなり。

(其二)は本論に入るに當て美術に建築彫刻繪畫三種の區別ある中に、特に塑像術を擧るものは『形体の全体に通ずる精神「我」の全体を支ふる人格を現すもの獨』之に於て望む可ければなりといふ。(其

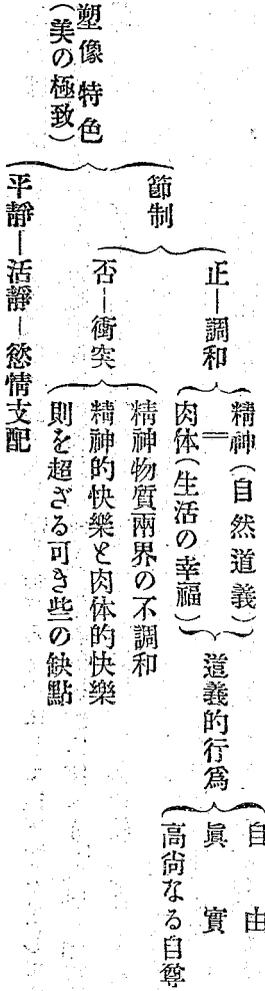
三)は即本論に入れるもの、概括して人生觀を論ずるものにして以下順々として説く所の概念を提括するものなり。曰く『希臘塑像術の發達は全く其道義的發達に伴へり』又曰く『希臘の人生觀の極致は最善最美の道義なり』と以下皆此最善最美を證す。(其四)即塑像の特色を擧ぐ、曰く節制。平靜。節制とは凡て精神と肉体との完全なる調和によつて生ずるものなれども其不一致なるよりして従て人間は不完全となり遂に三ヶの衝突を來すものなり。希臘人は即然らず『外部生活の幸福を以て内部の自由となし道義全く自由』にして『其道義的行爲に自由眞實高尚なる自尊の特性あり』故に彼等には『善即美美即善』なり。是吾人が亦理想とす可き所に非ずや。吾今少しく衝突よりして之を論せん。

人は飛禽走獸にあらず、故に必ずや其間大鴻溝ありて相撰ぶ所あるものなり、即ち禽獸は肉体的快樂を有するも精神的快樂なし、され共人は肉体的快樂と共に精神的快樂の天與せらるゝあり。されば人にして精神的快樂を忘れて只肉体的快樂のみ貪らば禽獸と相距る遠からず相選ぶものなしといふ可し。既に人は萬物の長として靈妙の精神を有するも、其精神をして肉体的快樂の爲専ら貪慾の器械たらまむれば、猶人を醫する良藥が人を殺すの毒となるが如く却て之なきを思はしむ。され共彼恐る可きモルヒテも適度調和を以て用ふれば人の病を治するの劑となる。夫れ然り調和の効や大にして不調和や恐る可し、豈徒らに精神的を以て肉体的の伴隨たらまめて可ならんや。希臘の塑像に於ける人生觀は最此極致に近けるものなり。然るに翻て當時社會の現狀に視よ、果して此肉体的及精神的の快樂相一致し居れるか、吾は斷じて否と呼ばんなり。噫其乖離や甚しく世の澆季や滔々として天下の人を皆濁流の渦中に投せんとす。小人は璧を懷きて罪あり常人金の光明を見るや

營々として日夜衣食に是奔走飽食賤衣金殿玉樓を以て無上の極樂となしてエデンの花園にも毒蛇の蟠れるを知らず。利の爲には妻子を棄て、蟻集し、慾の爲には三親相反目して省みず、利己主義拜金宗の徒弟となり浮雲の如き此世の慾を擅にして醉生夢死たらざるもの少なし、之を雲上より見れば走屍行肉といはざるを得んや。かゝる肉慾の奴隸は實際的學問を喜びて精神的を棄て、道德の談を以て

空となし哲理の研究を以て無用の長物となす、是肉体的快樂の爲には精神的快樂を忘れたるなり。之に反して世の哲學者なるものは玉を懷きて函中に藏し終るものと一般、専ら探邃鉤玄博く百家の書を読むで自家の研究にのみ耽り筆に口に大言裡耳に入らざるものを臚列し以て自ら樂み、ペダントとなり了らざるもの少く哲學の本志を忘れて局部に止まり厚生利用世に教ふる所なきに至れり。是亦小人が肉体的快樂たると等しく精神的快樂の奴隸にして前者を消極的缺點とすれば後者は亦積極的缺點たるものにして共に過不及の一に居れり。此乖離や實に社會をして不具ならざるもの完全なる人完全なる社會は此兩者の平行一致にあり。噫此篇を読むで頗る深し世の淡々者流須らく本論第四を三誦すべきなり。

平靜は節制と共に此特色なり、即こは『慾情を支配し自識の働きが慾情の内外に活潑なるに因て生ずるなり』。されども決して死するにあらざして活ける也。故に靜なる可ければ則靜に動く可ければ則動く、所謂動中の靜、靜中の動にして之を靜と動と見るも必竟相對にして希臘の平靜といふも活動ありてのものなればこゝにいへる、『剛健なる身体に顯はれたる活潑烈火の如き精神に結合するに些の壓迫禁制なき自然の道德的平靜を以てす』蓋し又精神にある動中靜靜中動の出現なりと云ふ可し。乃ち知る節制平靜共に合して美の極致となるを、本論の研究人に節制平靜を教ふ深く意のある所なる可し、今之を演繹的に解剖すれば次の如し



(其五)は頭部と身体との調和が統一平均にして精神と物質との完全なる平均の最頂點をいふ(其六)は解剖的に形狀を觀察せり、其例證豊富就て得る所多し。(其七)は終に及びて裸体と衣服との問題につきて論じ服裝の極めて簡單自然なるをいひ、而して曲線の美の最美に最完全なる裸体の美が女性に少し缺けて、男性に完きを見る然るに當時日本文學家美術家が女性の美のみ揚げて男性の美を抑ふる弊を覺醒するは一に此研究を以て最良法となす。されども別に深意ありて之が故のみにあらずといふ誠に然らん余は思ふに第一第四の邊詳説せずと雖一篇の道德談なり、君の眼夫れ高ひかな。評し終れば蕪辞頗る澁しと雖も得る所大なるを謝す猶誤謬の點に於て教ふるあらば幸甚なり。

次を『大村産眞珠貝に就て』とす濫江君の斯學に忠且勉なる、羨望の至りなり。此論定めし有益の文字なる可けれども門外漢の無趣味ハ評するに由なし。

雜錄第一を『檢非違使と彈正臺』となす淺井君亦頗る斯道に盡す。然れども吾に於ては甚たしき趣味なし故に默す、只其序言の長々しき斷はり書はあらずもがなと思はれ却て君が言のアイロニイならざるやを思はえめんか。杏城生の『韓文公』を第二とす毎も乍ら評論的史傳の文章極めて鮮に同情の叙筆頗る圓熟なるを見れども今は之を評する能はず。

『紅雨樓雜筆』艶なるかな此樓名此艶なる名の下に艶筆の蝶二君、久し振に見參せり。(一)壇の浦。君が文頗るやさしき中に悲を寫すに切なりと思ひしに、今冒頭此篇に於て艶かなる唐詩の調の如き漢文字澤山にならべられたるが未だ嘯みされざるやの嫌なき能はず。鐵を化して金となすとは女子の金言なり。吾は君に於て此種を取らず辻占賣の如きを取るものなり。偕壇の浦の前半、是調羹を嘆く往年の傾國の語を聞くを説き後半亦平家の没落につきて『瓊姬の膝に眠りし』榮花の夢のさめしをいふ。『その何の故たるを知らずといふもの蓋し知るべきか。(二)辻占賣る乙女。は悲しき哀れなる少女が無情の答に苦しめらるゝ所にして短篇悲哀の文字』吾子の愛を金にかゆる親もありけり』といふ社會の腐敗豈此の如く小なるものならんや、されども君が此落筆は頗る同感なり。(四)手飼の犬。あは

れ人の情の畜類にも劣りけるか』は余も非常に同感なり、又此篇は零落枯凋の様態に見受けらるれば  
（三）と共に成功の一なる可し。憚なく言へば君の文極めて切なりと雖文句に所々何にでか見た様な  
と思はまむる所あるが玉に瑕なり、繰回して鉄を化して金となすの言を呈せん。

文苑極めて豊富皆其妍を競ひ其美を争ふ、誠に花笑鳥舞の別天地なり、かく盛大なるを見ては吾人欣  
喜に堪はず、其猛進を祈りて之を評せず。只雜報中投書「諸君子と共に泣け」の如き感慨有用の文字陸續  
として容謝なく出んことを希ふものなり、世に思ふて言はざる程馬鹿らしきはなし。記し終て茫然自  
失自ら愚の愚なるを知らず天の一方を睥睨して忽ち擱筆寂又莫。

雅 報

○春 光 來

けさ見れば山も霞みて久方の

天の原より春は來にけり

實朝

悲風漸瀝として山野の雪を渡り、生艸枯れ、枯木  
折れ、乾坤復、生氣無く、寒月徒らに澄幽して、死  
の天地を照すの時とさへおも

Und dreunt der Winter noch so sehr

Mit trotzigen Geberden,

Und streut er Eis und Schnee umher,

Es musz noch Eruehling werden.

エムマヌエル、ギーベルが與へたる「希望」は吾  
を欺かざりき。やがて庭前氷を見ず。迥かに望め  
ば、白層々として天碧に映じたる遠の山々は、頓  
に雪次の濃を脱して、淡装婉然、春霞の簾を捲く  
入りて書窓に座すれば春風戸隙を窺ひ、

Der sanfte Schneieher Bluetenhanch

Schleicht durch die engsten Ritzen auch.

— W. Mueller.

去て後苑を歩すれば一枝已に春風を帯ぶ。

The budding twigs Spread out their fan

To catch the breezy air ;... W. Wordsworth.

漸くにして自然は眠より覺め、天地新成、乾坤生  
氣有り。於是乎讀書の人は卷を投じて青靄を踏